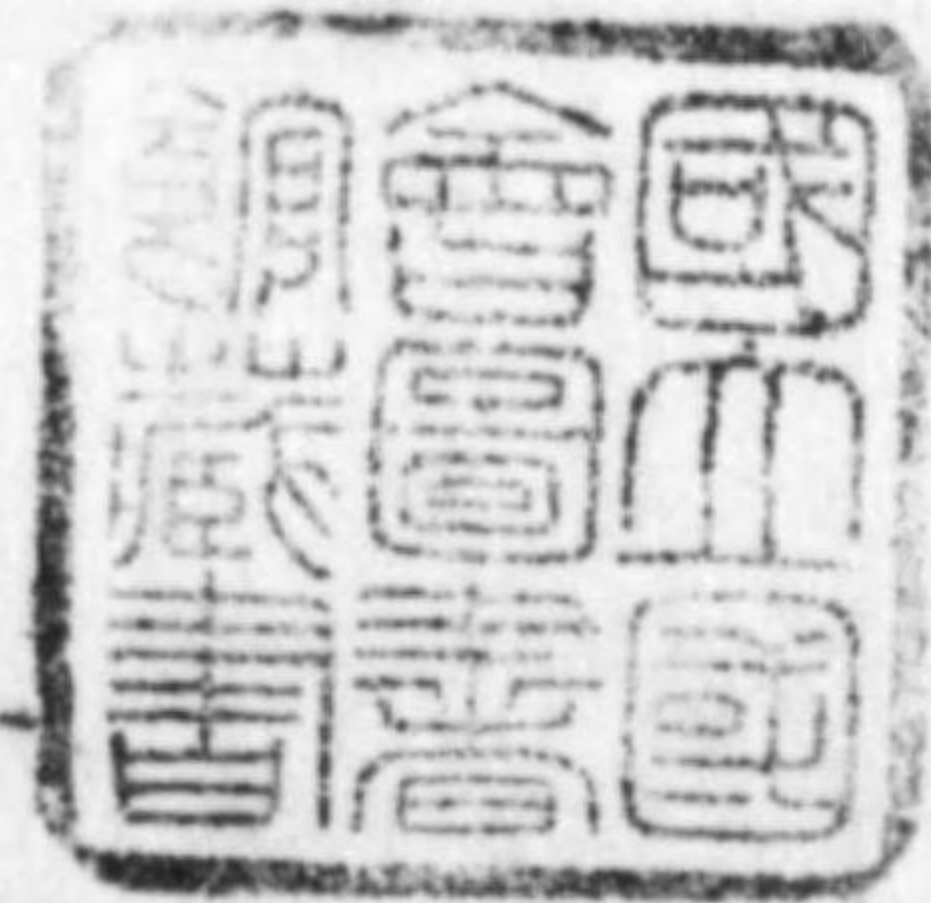


淺田宗伯翁傳 卷中

289.1

A819Aa



210051

淺田宗伯翁傳卷中

第七章 著書

信濃 赤沼金三郎著



余嘗て王舟州の四部稿を閲し其著述の浩瀚なるに驚けり然れども彼れ文章を以て命となし、一種奇僻なる古文辞を創出し、畢生文學に従事せしを以て其著書の多きこと當然とすべきものあり、今栗園翁の著書を閲するに至りて、其著述の多きこと殆んど人力に非るかを疑はざるものあり。

翁二十二歳を以て東都に出せしより、刀圭の業を以て家を興し、治療に奔走して寸隙を得ず、最初ハ生活と闘ひ、壯老の後に及びては幕府の侍醫に擧げられ、青宮の尙藥奉御を命せられ、職を辞するの後、病客の診を乞ふもの常に門に充ち、八十の頽齡を以て、疾を得る前日迄は治療を



親せりと云ふ、此の如き多忙の際を以て、零細の時間を集め、等身の著述をなせしこと、豈に驚歎の至に非ず耶、我儕文學を以て身を立つるもの、一たび翁の著書を觀るに及びて殆んぞ愧死せんと欲するの思あり、翁は醫學と醫術とに於て、古今に卓絶する深遠なる學識と特絶なる伎倆とを有するのみならず、詩文の才に至りても優に文士の間交りて、才鋒を頡頏するに餘あり、是を以て翁の著述の之を二種に分ち、一は醫學上に關し、一は文學上に關するものとなす、其醫學上に關する著書に六種あり、第一創見治按に屬する著書、第二古書の注解に屬する著書、第三經驗雜話を録せる著書、第四古人の名言卓論の醫術に裨補あるものを輯録せる著書、第五醫家の史傳に屬する著書、第六雜著これなり、文學上に關する著書に四種あり、第一史傳に屬する著書、第二漫筆に屬する著書、第三詩文に屬する著書、第四戲著これなり、第一種に屬する著書は、脈に關しては脈法私言一卷あり、病に關しては

傷寒辨要一卷、雜病辨要三卷あり、證に關しては傷寒雜病辨證三卷あり、治に關しては古方藥議五卷、傷寒翼方一卷、雜病翼方六卷あり、四科概通の書に、傷寒辨術一卷あり、此八部の書を以て門生を教授し、こきを醫學の小成となす、其入門の書に、醫學智環一卷あり、朝夕誦誦せしめ、會通の書には、醫學典刑五卷あり、精究玩味せしむ。

脈法私言は、仲景の脈法の叔和以來の説と異なるを辨し、脈名と脈狀とに就て其義を論じ、脈學の捷徑を開けり、傷寒辨要は、三陽三陰の證治を辨し、合病併病壞症の治例を定め、治法の規則と爲したるものなり、雜病辨要は、金匱要略の病名に本きて其大經大法を論じ、各病の陰陽表裏寒熱虎實を辨じ、次に先哲及び自己の考按を附し、仲景不傳の妙を發揮せり、傷寒雜病辨證は、傷寒論及び金匱要略の諸證に就て其名義と部位とを辨じ、又病名と病證とを明にして治術上に於ける發明亦少からず、古方藥議は、本草諸家の説と仲景の方意とを考へて其主能と活用とを辨

し、晉唐の諸本草皆本論に淵源するを知らしむ、傷寒翼方並に雜病翼方は、晉唐以下先哲の發明して治驗する所の諸方以て傷寒及び雜病の補翼となり、經旨に愜ひ日用に切なるものを撰ひ、以て治療の考檢に備へたり、傷寒辨術は、傷寒の大要を論じ、治術の規則を立て、古方後世の弊を論じ、脉病證治の楷梯を示したる者なり、此書は翁が少時の著に屬せしが、喜多村寛之に序して曰く、所著傷寒辨術一書、直抒胸臆、卓然有得、而不踏世醫鹵莽之弊と、以て當時の名匠に推重せられたるを察するに足きり、蓋し此書の翁が初めて江都に來り、幾もなくして疫疾に罹り、窮愁艱苦の間尙は自ら其志氣を激勵して、其嘗て得る所を記したるものなりと云ふ、黒田孝之に跋して曰く、取其書讀之、則權衡古今、辨晰得失、陰陽之位、虎實之分、能書其間奧、使讀者殆如入仲景之門、牆而親觀其方法之富也、而其詞氣超邁、悲憤雜出、此豈鬱勃之氣、浩然洋溢于毫端者乎と、以て其書の價值を概するに足れり、醫學智環の二篇に分ち、傷寒及び雜病の醫

論と並に醫方とを論じ、勿誤藥室の課程に充てたる書なり、醫學典刑の、古人が醫を學ぶの法を採輯し、釐めて習業診視治例藥案箴規の五類となし、習氣を一掃して偏見を持たず、醫を學ぶ者をして、支那醫制の大要に通じ、診治藥案の概略を詳にし、且目的を確立し、志氣を激勵せしめんが爲め、歷代醫法の典刑と爲すべきものを取り、入門の軌塗を示せり、以上舉ぐる所の外、險證再問二卷、全百問一卷、傷寒吐則一卷、後芻言一卷あり、險證再問全百問の、難症の治療に關する問目に答ふるに、數十年來の經驗を以てせる書なり、傷寒吐則は、長沙の法に本つきて其吐すべき証確然たる者を論じたる書なり、後芻言は、徐洄溪の慎疾芻言に倣ひ、今世の醫風異端に陥り人命を草芥にするを悲み、古聖の訓を掲げ之に其經驗する所を傳じ、以て古醫法を維持せんことを期せり、これ翁が最後の著述にして時に年八十なりき、山の靈芝を採り、海濱の貝殻を採り、第二類に屬する書に、傷寒論識六卷、雜病論識六卷、金匱要略辨正六卷

瘟疫論刊誤五卷、傷寒論議並に雜病論議は中西鷹山の遺意を繼ぎ、辨正名數解の未だ言ひ及はざる所を補ひ、博く諸家を折衷して固陋に流れず、實用に親切にして考證に泥まず、一機軸を開きたるものなり、金匱略辨正ハ、中西鷹山傷寒論辨表に倣ひ、偽を析じ正を表して、以て金匱玉函要略方論を疏釋せるものなり、瘟疫論刊誤は明の吳有性の温疫論に誤謬多きを惜み、和漢十三家の著に據りて校訂を加へ考証を附したるものなり、第三類に属する著書には、治瘟編二卷、橘窓書影四卷、全續編二卷、橘黃年譜三卷、刀圭漫錄五卷、治瘟編は安政年間瘟疫流行に當り、實驗考察せし要点を記して後學の津梁と爲したるものなり、丹波元信之に序して曰く、議論之確實、而用藥之允當、不可易也と、橘窓書影、同續編ハ六十餘年間刀圭の業に従事し、廢を起し瘡を治めたる實驗を録したるものなり、橘黃年譜は、天保七年醫

術開業より明治元年に至る迄の間に於る年譜にして、治療の効驗を主とし、一身の浮沈國家の隆替より、醫術の盛衰、外邦の治亂に至る迄、日夕親聞する所一切之を記したるものなり、刀圭漫錄は、戊辰以後に係る實驗と發明とを記したるものなり、第四類に属する著書には、瘍科廣要六卷、産科集成三卷、同附錄一卷、方讀便覽八卷、勿誤藥室方函古訣二卷、古方類按五卷、袖珍方三卷、瘍科廣要は、内外合一の説を立て、上は靈素隋唐より下は宋元明清に至り、其説の外科に涉るものは搜羅薈萃して、其体裁を多紀葢庭の雜病廣要に擬したるものなり、今村了庵之に序して曰く、嗚呼栗園、以、憫憫雄偉之性、兼精鑒確識之學、啓前人之秘鑰、發後生之聾盲、可不謂瘍科慈航、外療室筏也と、産科集成は、翁の先考濟庵賀川氏以下専門傳受の書十二種に就きて其要を纂輯せしもの、散逸せんごとを恐き、其門人黒岩爲敬に命じ、門を設け類を分ち編して一書を成したるものなり、方讀便覽ハ、古

今疾病の變あり、方法も從て同じからざるにより、奇疾怪症を細舉し先哲諸説の同異得失を比較し、其部を分ちて後學の檢討に便ならしめたるものなり、方函口訣は、翁が各方の功效を詮釋して、配合活用の妙を指示せるものを翁の義子宗叔氏が筆記せる書なり。

第五類に属する著書に、皇國名醫傳前編三卷、皇國名醫傳三卷、先哲醫話二卷、杏林風月二卷、杏林雜話一卷、皇朝醫叢十卷、全續編一卷、皇朝名醫傳前編、慶長以前に係る本邦名醫の傳を三百十餘部の書より引用して二十五年の歳月を経て成就せるものなり、皇國名醫傳、慶元以來名醫百有餘人の事蹟を聚め、行狀墓誌系譜略傳及び著書文集節記等の確實なるものに依據し、採摭編輯して三卷と爲したるものなり、先哲醫話、後藤良山以下十三家の治療に關し、獨得發明する所の説を舉げ以て醫傳と相映發せしむるものなり、杏林風月、上ハ懷風經國凌雲萬葉より、下ハ二十一代和歌集及び諸家の本集に就き、苟も醫林に

て詩を賦し和歌を詠する者あれば、悉く之を網羅して以て名醫傳の外傳に充つべきものなり、皇朝醫叢并に續編は翁が醫史傳の材料に充つるが爲めに、先哲の卓論名說雄篇快牘より碑銘行狀に至るまで旁搜博採せるものを、門人齋藤正路安井知足をして、雋を抜き、英を摘み、以て之を編修せしめたるものなり。

第六類に属する著書に、原醫一卷、警醫紀事一卷、西醫指要一卷、内科剛微私評一卷、牛渚漫錄四卷、續牛渚漫錄一卷、澡泉餘錄一卷、澡泉續錄一卷、暴瀉須知一卷、脚氣心得一卷、麻疹心得一卷、全續錄一卷、微毒懲忿篇一卷、馬脾懲忿篇一卷、行軍備急一卷、養幼新編一卷、小兒壽草一卷、通俗醫法捷徑二卷、流行病救法一葉、博濟堂脚氣提要一卷、學晦堂醫話二卷、栗園一夕話一卷、刀暇錄五卷、牛渚偶談八卷、勿誤藥室學規一卷、醫學讀書矩一卷、警醫紀事ハ世人の西醫に惑溺するものを警醒して、生徒の鑒戒と爲さんが爲め著したる書なり、其説に曰く、脊裏の大動脈ハ、百脉の源たるこ

との靈樞五音五味篇に出て、記性の腦に在ることの黃庭內景經に見ゆ
其他體を刮き骨を驗み、腫を刺し絡を決し、筋を結ひ腦を搦し、背を剝り
腸に瀦することの、軒岐已に之を論じ、俞華既に之を行へり、而して蟻鍼
角法、打濃座導、浸脚芥泥等の、漢唐以來の方書に比々之を用ゐたり、而
に味者反て洋學洋術と爲し、以て其開創に誇るの何ぞや、蓋し軒岐の淵
奥、俞華の精詣は、通博明達の士に非るよりは、其藩籬を窺ふこと能はず、
是を以て鄙瑣庸陋の徒の、怪誕驚俗の書、器數易窮の説に惑溺して、竟に
吾が聖賢の道の何物たるを知らず、豈に哀むべきの甚しきならずや、余
深く此に感ずるあり、因て洋醫治療の一斑を録して警醫記事と曰ひ、以
て生徒の鑒箴と爲すと、西醫指要は、今村了庵の泰西七科に就きて其大
意を譯したるものを、古聖昔賢の明体達用の説を以て批評したるもの
なり、内科闡微私評は、美國の嘉約翰の口授して、莆田林湘東の筆述に成
れる内科闡微を一々批評駁撃せるものなり、其論評の如何は知らずと

雖も、西醫天下に跋扈して漢醫の僅かに一隅に割據し、孤城落日外に勢
援なき日に當り、戈を執り戟を揮ひて單身圍を衝きて、旗鼓堂々相當ら
んとする勇氣は實に欽仰に堪へざるなり、漢醫の能く其命脉を保ちた
るの、翁一人の力と稱するも蓋し諛言に非るなり。

牛渚漫録の、經史百家の書に就きて其言の醫事に關するものを摭拾し
施治の資に供したるものなり、澡泉餘録並に續録の、函嶺熱海の温泉に
浴せし間、書を讀み醫事を談じ心に會するあきば、之を副墨に載せたる
ものなり、僅々一小冊子に過ぎずと雖も、亦以て翁の學識を察するに足
るものあり。

暴瀉須知、脚氣心得、麻疹心得、全續録の、通俗の爲め平易の文字を以て豫
防法并に治療の大要を録したるものなり、微毒及び馬脾風懲惑篇の、一
の翁之を口授して門人黒岩爲壽の録する所となし、一の馬脾風を以て
其女兒を失ひたるに懲り、古今の説和漢の方を拔萃して以て、不虞の用

に備へたるものなり、行軍備急の、徳川氏の末路征役の事あるに臨み、其注意すべき條項を挙げたるものなり、養幼新編、小兒壽草の、翁が皇女、滋宮内親王の尙藥たりし際、同僚清川玄道等と醫局に會し、奉御の事を議し、育嬰の道を研究し、其得る所を録せるものなり、通俗醫方捷徑及び流行病救法の専ら俗家病疾を抱く者の爲めに設けて衛生濟人の用となしたるものなり、脚氣提要の、博濟病院醫員か翁の脚氣を療したる方論を輯めたるものなり、學海堂醫話の、翁か喜多村栲窓の醫術に關する談話を輯録せる書なり、栗園一夕話は、翁の醫學に關する談話を門人が輯録せるものなり、刀暇録は、醫經、各方、確言、事實、譬喻、僞語、訓詁、虛字、辨正、雜事の十門に別ちて經史子集の語を抄録せしものなり、牛渚偶談は、翁の博識宏學を以て其の多年胸中に蘊蓄する所を舉げて談話せしを、門人三浦宗春が編次し、翁の評閱を経たるものなり、勿誤藥室學規は、醫學の要、醫術の要、臨病の要、處己の要を挙げ、門生に爲學の方針標準を示したるものなり、醫學讀書規は、古賀洞庵の讀書矩に倣ひ、醫籍の大綱を論じ、讀書の次第を示したるものなり。

以上舉ぐる所の著書は、通俗の爲めに著したるものと、語録口授に屬するものを除きては、悉く漢文を以て之を記し、未だ印行に付せざるものも悉く清書して綿密なる校正を加へ、直に欵刷に附することを得べからむ、其己に上木せしもの頗る多きも、大抵非賣品に屬するを以て世人の知らざるは遺憾なりと云ふべし。

文學上に關する著書には、史傳に屬するもの、讀史問話あり、此書は翁か東宮に侍坐するの日に當り、本朝近古の英雄豪傑の嘉言善行を話して訓誨の資と爲したるものを記して成れる書なり、翁の緒言に曰く、

臣常曩爲「明宮尙藥時、侍御之臣某々、毎夜以先哲懿言善行各一則爲訓誨之資、臣亦與在席末、然諸臣之言、概係近古歐米之事、而臣孤陋不通外邦之書、唯舉本朝英雄事業、以爲談資、嘗聞徳川文廟在潛邸之日、新井

君美常揭歷代變革英雄興廢以爲話柄名曰讀史餘論他日文廟大有所啓發而况於萬乘儲君乎夫左右文武者姬周之教而本朝之於武特有上古神聖不待教者加之以聰明文達之道衛社稷保黎元者固不俟論而臣輩亦多識前言往行以畜其德存養修察積以歲月則洵不負爲萬古一姓之民嗚呼臣齡殆八旬喃喃言固乏推挽之力而獎贊之意則有之是所以此編之成也

村山德淳此書に序して曰く、

栗園淺田君醫而儒也君之年壯往于京師從賴山陽猪飼敬所諸老而遊枕經薛史學殖己富詩文亦超妙則純然儒也既而懸壺于江都聲名藉甚遠近乞治者接踵於門君則上自王公大夫下至市井賤氓慈眼視衆東西奔走不遑寧居如無復讀書之暇而著書等身悉醫家有用之書則純然醫也而終不廢經史篝燈夜讀有所得必錄有詩文集若干卷幕府擢爲待醫於是譽望益隆矣明治中興之初徵拜明宮尙藥君奮然自任以攝生養

護之重朝候夕伺率無虛日玉體益健遂正位

東宮天下想望風采談必及君勞績吁亦盛矣近日以年老辭官家居門前尙如市君爲人慷慨激昂常以維世道矯人心爲憂此編所載近古英傑奇節偉行而紀事簡明文字雅健誦讀之際俾人觀感興起曰嘗侍坐東宮之日每與侍臣話嘉言善行以爲訓誨之資大抵西洋史也君獨以本朝事蹟爲談欄歸則謀副墨爲漢譯久之裒然成帙是亦以啓沃爲任則儒之責也君齡殆八十嬰樂能飲談論風生有徐靈胎之風靈胎近代醫而儒者也

拙軒 村山德淳 撰

其雜著に属するものには吳鳳集一卷雲根奇踪一卷鼓腹集一卷あり多くは戯著にして友人の唱和の什をも併録せるものなり洋醫跋扈の間に於て翁は獨り漢醫を以て立ち離羣索寞の狀あるを見て人或は之を社日の狸に比せり蓋し初午や狸のことと思はる」といへる古句に因

るものなり、翁之を聞き大笑して歌を作りて曰く、

いさよらば狸となりて腹鼓力の限り打續けてむ、

と黒田議官乃ち畫工に命じ老狸鼓腹の圖を作らしめ、國歌を題して之を贈る、其歌に曰く、

打てや打て折はへて打て腹鼓人の睡のさめ行くまでは、

と、是に於て同人相和して忽ち一卷をなせり、眞に嬉笑唾罵皆文章を成すものと云ふべきなり。

翁少にして京坂の間に遊學し、鴻儒碩學に就きて經義文章を精研せしを以て、文學上の嗜好は既に少時に發達せしことは、當時の日記曠日雜記及び吊淺田城文に徴して其一斑を窺ふに足まり、然るに懸壺以來世途に奔走して文學上の嗜好を滿すに暇あらざりしか、天保十三年正月に至りて水府の學士鶴峰の紹介を以て海鷗社に遊べり、時に昌谷精溪澤熊山、川北温山之が牛耳を執り、佐久間象山、大橋訥庵、柳澤芝陵、各年壯

にして財鋒を以て相當れり、芝陵は翁と同甲にして最も親密なりしと云ふ。

丁未戊申の間、藤森弘庵居を翁の隣街北横街に卜し、専ら詩を以て友を會し、嚶々社と云へり、杉江春涯、佐藤蕉廬、山田畝卿、賀藤月篷、田口江村、黒田素行等皆知己たり、翁も亦其盟に與りしが、甚た詩を事とせず、一に醫籍を攻め、人の或は嗤笑するものあきは、放言して曰く、大丈夫當に上は千古の賢者を學び、下は以て百世の知己を待つべし、何を屑々乎として一世の人と文詞を競ふことを求めんやと、以て翁が立脚の地を見るに足れり。

翁の文章を以て家を成すものに非すと雖も、其詩文に於ける既に妙所に達し、其數甚た多くして諸体又具まり、中村敬宇先生翁の文を評して曰く、君の軒岐家の人豪たり、其名聲の盛なること振古未だ聞かざる所、餘事文を作るに具さに法度あり、太宰氏に駕して上れり、人情耳を貴び

て目を賤み、或は余か言を諛に近しと謂ふも、敢て顧みざるなりと、又曰く太宰先生の經學に遠くして前人の未だ發せざる所を發す、其一代の人豪たることは固より論するを俟たず、其文章に至りては、則ち護國の習氣を脱すること能はず、余の前評ある所以なりと、先生又了庵文鈔跋を評して曰く、深厚樸茂、昌黎に逼れりと、川田剛評して曰く、簡勁道拔にして筆力と識力と兩つながら高し、今の謂はゆる文人なるもの恐らくは下風に立つ能はずと、清客黃遵憲評して曰く、筆々精健、文中の三たび肱を折る老手なりと、大槻磐溪翁の詩鈔に題して曰く、

信山深處產奇才、昭代良醫國手魁、猶似先儒太宰子、

熙々乘運上春臺、

不唯運七濟斯民、著述醫人殆等身、欲識大家無不有、

緒餘詞藻亦超倫、

憶昔同盟會友群、海鷗社裡細論文、百年天地滄桑變、

落落晨星獨見君、

殷後頑民亦不多、太平時節樂如何、神風黨散海風穰、

問誦吾翁蒙古詩、集中有元寇七古妙甚故及之

此等の評語によりて以て、其文學の價值を察し、且つ當時の宿儒老匠に推重せられしことを見るに足れり、

翁の文稿には栗園錄稿并掌記八冊、栗園臚稿八冊、栗園存稿一冊、栗園餘草四冊、栗園文存二冊、近稿一冊あり、詩稿には栗園餘草詩二冊、栗園詩存二卷、續栗園詩存二卷あり、

栗園錄稿は、詩文の別なく、得るに従て之を録し、讀書の間意に會するものは又之を抄録したるものなり、栗園臚稿は、更に詩文のみを抄出したるものなり、栗園存稿は、友人の批評せる文章を集めしものなり、栗園餘草並に栗園文存は、前述の文稿を粗は整頓せるものなり、近稿は、反古の裏面に起草し未だ清書に取あらずる稿本なり、栗園餘草詩は、友人の批

評する所に係り、栗園詩存は門人三浦宗春、伊藤誠得が翁の詩古今諸体二百餘首を輯めて、歎刪に付したるものなり、續栗園詩存は、前篇歎刪以後の作を輯めたるものなり、栗本匏庵之に跋して曰く、

廻狂瀾於既倒、完危城於將陷、是丈夫遭遇之一難事、而當其局、任其責、勢不得退避、要畫己之才與力、必濟而後止、如栗園淺田君於漢方醫術、殆其庶幾乎、舉世泄々、不趨于歐、則往于米、醫之方嚮亦從轉矣、然君執一終始不變、人病其重圍援絕、而自許以急流砥柱、不特其膽略可畏、亦可以見養之有素矣、是以慕其學、悅其術者、信之如神、片言隻辭、爭先欲觀、况於其成章成篇、賦景叙情、時有懷抱可窺者乎、今茲其詩第四稿成、門人諸子、謀梓傳世、徵予言、抑予於君辱雁行肩隨、五十餘年交誼、當欲一言附驥尾、唯奈蒲柳望秋之歎漸切、不能脩辭以贊揚其英華、是爲可憾焉耳、聊書言以質之。

今左に翁の詩文數首を録出して以て其梗槩を示す。

百日紅園記

牛門之外、高阜透迤、雲樹霧縈、城煙絕迹、幽栗可居焉、是以自古名儒碩學往往居于此、而其最著者爲物徂徠之謏園、太宰春臺之紫芝園、近來繼之者川田瓊江先生百日紅園也、蓋聞維新之際、名古屋侯外山別墅、拓爲鍊兵之場、於是數百年老樹花木悉斷翳之、先生得其一木、以爲園、井汲泉之柱、須臾柱上生芽、而枝而葉、漸茂開花、則百日紅也、乃以名園云、余昔仕德川天璋夫人、僕直于此邸有年焉、因審池水末流有紫薇數十株、皆百有餘年物、其高殆二丈、花時紫雲空濛、雲水相映、蹊附茸萼、開謝相接觸、自六月至七八月、爛熳可愛、時々侍夫人徜徉于其下、而今其人與樹俱爲墟矣、又追憶曩遊安井息軒、墟谷宕陰、芳野金陵、藤森弘菴諸老、中村敬字、石合江村、尾臺榕堂諸同人、每月一次、迭主文酒之會、而先生時以弱冠、隨厨俊之後塵、步馬斑之逸躅、人推月旦、以爲後進之領袖矣、今也耆宿之人、騎箕化鶴、多不可追、而先生巍然爲文壇之老將焉、宜乎與徂徠春臺之園并聞、而

爲天下之名園也。古人曰：地以人重，信然。且夫俯仰二十年間，興廢有時，滄桑屢變，而此樹再茂，而光滑不可攀者，猶先生功德歷治亂而不可犯也。其花爛開耐久者，文章煥發施及後世也。然而其性喜陰，枝幹無風而自動者，與先生柔能守剛，卓然立乎萬物之表者，肖矣。余雖不詳園之勝概，臨此樹不能無今昔之感，故書以爲記。

此篇紅樹其始困於剪伐，厄於斧斫，獲江取而爲之園，井柱木，於是枯木再發，花葉爲貫，四時閱千歲之勢，猶獲江困厄其始而享榮名於後年，竊寓祝頌之意，其旨深矣。文亦井々有條，秩然不紊，非老手不能，敬服敬服。

劣弟 亮 妄 批

精神氣魄萬不可及，感服感服。

中村正直妄言

送井手健堂赴浪華序

鷺湖醫士健堂井手君，將砥行立名，在東京有日焉。今茲甲申夏五月，因浪

華廣濟院之請，將赴教師之任，就予問其所以爲教之方，予乃應之曰：子今跋千里之道途，觀山川之流峙，所行所至，莫非名醫鴻師，而治術之底蘊亦在其中，尙奚他求焉哉？予曾遊于京攝之間，僦舟上下乎澗江者數矣，方其下江也，舟初發，伏水未數里，宿雨適晴，四顧比叡，比良二峯，出沒隱見於煙雲杳靄中，至山崎八幡之際，天王山與男山屹然對峙，翠色欲滴，旣而夕陽西沒，遠寺疎鐘，如斷如續，使人潛思深省焉。又其上江也，有更奇焉者，入軒之濠，萬家點燈，舟夫解纜，漸過數橋，兩所開豁，遠而河泉之峰巒，蜿蜒曳碧，近而鎮城之粉壁，長橋之虹影，畫舫漁舟，往來于其間者，皆在自睫，頃之月上東方，水心碎金，可掬不可捉，遊意殆將仙矣。今夫拔邪扶危，得陰陽哮喘開闢之機，有如比叡比良，出沒隱見於雲煙杳靄中者，逞骨節壯，身體氣血雙實，有如天王山與男山屹然對峙者，精神盈虛消長，有似遠寺疎鐘如斷如續者，而百骸爽快，如萬家點燈，耳目聰明，如兩岸開豁，表裏相應，脈絡流通，如遠近之景勝，舫艇之往來，元氣蘇息，躍々然，如月上東方，人身條理，疾

病變幻亦無不備焉則子之於此行莫往不名師碩匠莫觀不寶典秘術焉况復浪華之盛仁皇篤恭之風與豐公威武之跡潛思深省而稽古論今審形勢之變攷盛衰之原辨得失之所在究舉措之所宜則醫之能事不俟他求而起枯肉骨之妙必有鳴于當世如扁倉張華者予將何言行矣勗哉

孟陽詩存序

余讀孟陽之詩而有深悲焉蓋其姿則瀟洒清秀其學則誠實慷慨其詩則溫厚雄渾其畫則嶙峋奇拔而其疾則肺痿咯血惜哉壯志未酬菁華先竭不特無以大展其所負并不獲稍伸其抑鬱沉頓之氣徒抱其才以沒矣余曩喪二弟失三子哭二孫而碩莫不食頑乎猶存每處治亂之際遭非常之選悲懼交并感淚未嘗不灑於懷也顧乃翁松塘先生今以詩學未鐸於大都其名聞海內揚播風雅詠賞花月左右咄々誰與唱和則情思之所鍾宜不能忘於孟陽設令孟陽尙在其喜亦何如哉嗚呼孟陽滿腔丹血不能沃之於鴻文鉅藻之中又不能吐之於聖主賢相之前而徒嘔盡肺肝以逝

豈白玉樓記待其人耶將天圖書之府不可以久虛邪何其豐於才而齎於壽之甚也抑方今我醫道墜地海內將歸異學孟陽嘗好我道刻苦淬勵欲窮其蘊奧天若假其年則駸々乎不知所臻豈是斯集之刻不可以己者而今與乃翁所以深悲者亦於是乎在焉

栲窓喜多村先生墓碣銘

昔征夷府之盛文政天保之間以醫學博通負天下之重望者有三人焉曰葦庭多紀先生曰學古小島先生曰栲窓喜多村先生時人評之曰葦庭如廳堂可以敬禮學古如門牆可以仰高栲窓如正寢可以盡誠其言雖淺亦可以窺其學之一斑矣先生諱直寬字士栗通稱安齋後襲父稱安正栲窓其號晚號香城幕府醫官槐園先生長子也妣三木氏先生天資穎異幼而端重若成人稍長肆力於學就安積良齋研經義學古文文政辛巳夏始入醫學考試擢授讀歷階進職天保辛丑秋選爲醫學教諭於是海內醫生仰慕先生名來謁者日衆咸虛往實歸其名噪然於一時既而入內班任侍醫

叙法眼、教諭如故、事務倥傯、猶能講究不倦、以繼開自任、曰醫與儒其道相通、醫之於素難、猶儒之有六經也、醫之於仲景、則儒之有四子也、六經不明、訓詁無由得其解、四子不究義理、則不能求其旨、然義理之與訓詁、各有所主、非分鑿異途也、故先生於素靈難經、治訓詁而注仲景書、特主義理、上自素難、下至仲景及晉唐之書、抽繹諸家、一掃膠輻、融會參酌、歸之於至當、約不失於疎、詳不流於繁、其經整頓者、凡三十餘部、就中素問講義、傷寒金匱疏義、爲世寶重焉、又思世沐國家之渥恩、身受特達之知、無涓埃報、因做武英殿聚珍版式活字刷印醫方類聚二百六十六卷及太平御覽千卷、獻納之於官、且置諸學庠、以廣其傳、蓋類聚者、醫家叢書之冠、收宋元亡逸之書若干、博通之資、無以尙焉者、而御覽、則考據之淵藪、在醫家亦不可缺之典矣、先生爲人寬宏樂易、待人以恕、而侃侃自立、期爲有用之學、有與同僚議不協、遂退職老于城西大塚莊、此時葺庭學古二先生逝既久矣、先生獨康健、西游于京洛、東登筑波、恒與俳士歌人、娛玩風月、與桑門、鐺流、談論心

性、怡然自樂、蓋先生之崇德鉅望、中道而隱逸、不能展其所抱負、洵爲天下惜之也、厥後數年、明治丙子秋、朝廷以先生所刊醫方類聚、贈之於朝鮮、蓋彼土亡佚、失其傳、今得再覩、可謂惠及異邦矣、醫官洪顯章等大喜、以爲國寶、朝廷爲賜金若干云、先生以甲戌十二月罹風疾、右身枯矣、猶能以左手作書賦詩文、然時々疾發、神昏不語數日、丙子十一月九日、遂不起、卒於家、享年七十、遺命葬於今戶稱福寺、先生配和田氏、生直敬、先卒、養湯川某子直正、嗣家、而和田氏沒、側室女芳野、未字在家、先是數月、寄書於惟常、曰枯木無再榮、死灰不復燃、余將不遠歸泉下、乃有東游學士、偷相訪、紅杏花深一片碑、句實爲識、哀哉、惟常爲諸生、初來江都、人無知者、惟先生一見、以斯道相許、辱交三十餘年、以先生蔭、列待醫之後、知先生尤深、况有臨沒之囑、可以不文而辭乎、乃銘曰、
惟學與術、繼聖開賢、於時不遇、於古獨全、彼競々者、咸屬忽焉、先生述作、海外永傳、墨水之厓、鬱々新阡、墓木惟何、冬青萬年。

次默堂上人述懷韵以呈

叢林雲氣鬱、	靈境自幽微、	中占明王坐、	千載揭光輝、
民庶仰威德、	香火滿龕扉、	主之者為孰、	默師真性非、
慈悲爰及衆、	能使枯瘠肥、	來者常得幸、	去者招禍稀、
吾見今緇素、	貪鄙與古違、	欺民又誣世、	難免素餐譏、
默師則不爾、	高風比堯巍、	茅茨甘艱苦、	寸丹却魔圍、
鉢裏毒龍伏、	法蕊貝葉飛、	精神之所貫、	極深而研幾、
聖上美其德、	夙賜幣與衣、	奉之倍清肅、	博施固所希、
眞月照塵界、	慈雲掩世非、	稱嘆僧與佛、	道德不虛歸、
遙過印湖水、	迢々入翠微、	溯松奏清韻、	嶺月揚明輝、
林間梵宇屹、	即識近禪扉、	上人固博愛、	惠心采葑菲、
登堂接麀尾、	枯體忽覺肥、	一面如千載、	知己眞所稀、
半偈雖未持、	玄妙終无違、	坐喜招提渥、	暫忘世上譏、

只愧吾生拙、	徒仰德量巍、	門外紅塵絕、	慈雲遠四圍、
庭圃多藥草、	殿屋仙禽飛、	曾聞卓異質、	先衆早知幾、
脫却功名窟、	潘然着緇衣、	靜坐觀无定、	大道所染希、
握手歡无極、	舉杯不應非、	徘徊出寺晚、	惜別未云歸、

蒙古入寇圖

胡元志氣日驕泰、	併吞華夏勢益大、	簸揚天地如打丸、
又向五方擅狡狴、	一朝大舉入騎鯢、	鯨鱷為城礮為屏、
兵氣衝波紫海黑、	毒烟迸霧蠻風腥、	東方神武萬國魁、
尊王攘夷確不猜、	相摸太郎最英斷、	邊防森嚴叱萬雷、
憤極鬼神亦靈武、	卷起黑潮颶颶怒、	漢胡雞林百萬兵、
蛟龍負汝歸水府、	鎮西諸將捲風雲、	孤島之間殲殘軍、
狼貪終致中華耻、	異域鬼哭簇妖氛、	嗚呼治亂興亡在須臾、
那知殺運移東隅、	殘明弱清鑒不遠、	廟堂請見元寇圖、

新釀歌

藤郎用兵難波國

戰血化禾酒有力

仍把名刀入酒名

正宗正光人所識

丈夫得此喜何極

宛如飛空生一翅

引杯飲盡幾名刀

胸可磨兮腸可拭

誰道新釀僅潮顏

安知紅焰頽玉山

心旗意馬前無敵

萬里愁城忽躋攀

赴清公使何如璋張斯桂招於墨水千秋樓與諸子同賦

瀨氣橫天末

筑峰晴翠流

陰陽雖異曆

彼此共中秋

迎月欄斜倚

屏燈簾半鈎

優遊今夕話

他日遞西州

次黑巖靜山歲晚感懷韻

七十我年老

桑榆晚景驅

春風忽施化

老馬復爲駒

天地閱千古

人間有万殊

讀書元所願

嬰樂尙伊吾

宮中書感

雨霽金門麗

香颺紫掖幽

微軀何僂佻

寶輦得追游

海嶽恩何渥

涓埃志未酬

唯期九霄上

吾道復逢秋

送張魯生取清國

仙槎凌浩淼

雄志豈蹉跎

蓬島留文藻

鵬程趁海涯

唱酬緣不少

離別恨偏多

只願通鴻信

金蘭契一家

白露爲霜限體

秋晚渾閑適

披衣候月明

夜幽鐘有響

風斷露無聲

瓦屋鴉棲冷

板橋人迹清

依稀認露雁

晰噀辨烟城

始識新霜滿

時愁舊物更

堅冰知不遠

回首轉傷情

百日紅園小集席上次主人韻

赤城松樹紫芝泉

接跡名園有宿緣

海色搖青遙映屋

山光拭翠半摩天

主人厚意醇如酒

故老閑談日似年

只合悠々永今夕

頽然善學米家船

同喜多村栲窓黑田子友倫賞林祭酒錫秋園

層臺取次接村橋，
醉歸何怕晚程遙。
華表鶴還雲杳々，
空餘堤上柳千條。

次今村了庵之韻却寄

前途休說命終窮，
道推大體付蒼空。
一片松心遺孽在，
只合清真養此躬。
不愁明月沈昏霧，
深山孤立歲寒中。
志守古經陳赤俗，
自使狂花舞暖風。

次田中華城中秋無月韻

醫道紛々亂若絲，
綺席終題醉後詩。
與君別約中秋興，
胸裏清光相映時。

浪華即事次遠田木堂韻

魏貅十萬震雄謀，
英氣從來壓老猴。
先止旌旗安上國，

漸移兵戟鎮西州

今日城中壯士淚，
滴爲紅蓼滿川秋。

宮中作

畫靜花如睡，
日長柳自垂。
天顏知有喜，
乳燕戲瑤池。

題羽田子雲所畫露根竹

風雲去無迹，
月露護吾躬。
高節非敢守，
虛心蟠半空。

次默堂上人韻却寄

避世心如雲，
救人誠貫日。
香薰一炷煙，
燈照讀殘帙。

陪明宮遊幼穉園

豎子真可教，
妙存化育中。
聰明何所發，
默識與神通。

二木三草圖

爛然陽且色，
識作衆方魁。
匹似臯陶禹，
堯廷衆偉才。

題柴胡湯圖

誰借化工手，摸來湯液圖。三禁何所守，正在魯與愚。

癸酉一月第六日過千壽驛

飛驒曉過千壽川，膾殘魚市唱新年。鶯花底事猶減口，

暗道前冬第八天。

古刀根川

春色未回霜滿林，枯蘆殘荻伴行吟。霸圖空盡刀江在，

憶起當年從獵心。

舟中書感

飛花如雨柳如烟，畫舫歡游記昔年。十有三春成昨夢，

重來墨水一悽然。

神奈川曉發所見

天半芙蓉脚日華，東溟曙色鎖烟霞。路傍殘雪斑如繡，

映帶春風幾樹花。

深川夜歸

海濶天高絕暑氣，長橋北望水紋分。秋風吹上三更月，

斜向二州爲白雲。

舟過中川

孤蓬載酒月如烟，夜色蒼茫水接天。好是柁樓相對酌，

衝寒千里下刀川。

赴船橋驛車上所見

恩波爲洗我吟腔，車轍生風馬首雙。万頃稻田青一色，

遠雲送雨過刀江。

水海道途中作

常山總水去來頻，汀雨岫雲秋復春。何日描將眼中景，

臥游眞作畫中人。

塔澤口號

擲却青囊七日間

摸山範水得清閑

白雲亦似吾人意

幾度颺然出岫還

送鱸松塘赴北海道

何日歸來別中興

妙齡吾昔遠游時

慷慨悲歌酒百卮

老去更無湖海氣

爲君且作別離詩

展谷中垣內霞峰墓

我願歸田青一色

東台无復舊游蹤

賞月吟花想昔逢

故友琴書何所瘞

低徊墓畔聽疎鐘

第八章 濟時

翁の祖先の多田滿仲より出づ、後、世變に遭ひ落魄して農を以て業となす、祖父東齋に至りて志を武藝を專らむ兵學を講究せしが、當時武を以て名を成すべからざるを悟り、嘆して曰く、古の君子朝廷に在らずんば、

必ず醫卜の中に在り、己むなくんば則ち醫なる耶と、始めて醫を以て業となせり、翁の蓋し此精神を遺傳せしものゝ如し、翁の作る所の邊蒙澄源序及び經世雜抄序の二篇に見るも、亦以て其慷慨の志經綸の才を察するに足れり、其文に曰く、

邊蒙澄源序

王者不治夷狄、春秋之大法、外而不內、疎而不戚、來則禦之、去則備之、先哲之確言、在漢土已然、况我赫々日出之域、屹然立于東溟之中、萬古一王、士氣英武、陸戰之悍、海備之嚴、足以峻絕外夷、幕議鎖國、以爲二百餘年之盛典、法至善矣、今也鎖國之制一弛、醜虜之窺我者不一、而廟堂之士槩謂結怨於夷、則讐我愈深、是殆不識夷情者也、夫夷者、犬豕爾、豺狼爾、震之以威、則懼、示之以怯、則驕、昔郭欽獻之策、江統之課、皆以夷狄處內、必爲深憂、是能識夷情者也、晉不用其言、終至於五胡亂夏、國亦隨滅矣、于嗟、沙磧之濱、瘴海之外、犬豕之夷、豺狼之虜、於我何和何親、今一結之以隣交、許之以互

市使其往來于我，不過十年，國家疲弊，而蚩々之氓，爲左道所誑惑，皆將尊彼鄙我，脫刀荷銃，而神聖之威風遂漸滅矣。其勢或夷虜交侵，不一敗塗地，則屈膝于穹廬之拜，此吾友權藤先行所以有邊釁澄源之作也。或曰：先行游藥石之藝者也，何越樽俎而爲此危言？余曰：夷雖外患，實甚於內疾，若不攻之根，所謂養痾於心腹，其爲疾毒，胡可殫言？爲醫國，何必藥餌云哉？或唯々而退，乃書矣。先行之爲之下，鍼砭也。語曰：上醫醫國，何必藥餌云哉？或唯々而退，乃書爲序。

其論する所或は固陋を免れずと雖も、其氣魄の雄、能く懦弱男子を起らしむるに足るものあり。

經世雜抄序

嘗觀數千歲興亡之迹，考其政治之得失，其所以成敗者，皆非偶然也。每成于簡于儉，而敗于煩于奢，何者？事簡則易從，用儉則有裕，事易從，用有裕，於是乎可以鎮撫四海，而壓服蠻夷。事煩，則難供，用奢，則不足，事難供，用不足，

於是乎紀綱弛廢，上下困弊，奸匪乘隙而起，莫之能禦，以訖于亂亡。蓋創業之主，其治未嘗不簡易恭儉，然昇平日久，浸假而煩，浸假而奢，爲入君者，皆生於深宮之中，長乎婦女管御之手，不知稼穡之艱難，事煩難以養威尊，至事不供而用不足，則徒腴生民之膏血，以供無用之費，猶且不給，仲於商賈，萬一有事，何以固封疆，捍寇賊乎？近來洋夷窺覷我邊疆，幕府命諸侯建議獻策，取捨其宜，以備不虞，國家昇平三百年，雖明良相繼，遵奉舊章，不敢失墜，然令條日密，則事不得不煩，體勢日尊，則用不得不屈，此董子所謂當更張之秋也。苟在上者，稽百代興亡之迹，恭儉修德，以立民極，而匡姦佞於朝，抽賢良於野，嚴兵衛，修器械，訓練經畫，皆合機宜，則可以制狡夷於萬里，而延國脉於百世，豈唯區々防禦之謂？國家中興之機，識者所仰望也。頃爛柯林翁就諸家論策之中，拔萃摘要，間加批評，以爲一書，名曰經世雜抄，命予序之。予一閱嘆曰：翁以著手妙品，擅名於一世，紋楸飛玉之際，神出鬼沒，蛇伏龍騰，勝算活機，每發於入之所不慮，宜乎此書亦多出于入之意表也。余

深淑其意遂忘固陋題以詹言

此文を讀まば、翁の經綸の略、紙上に躍如たるを覺ゆるなり、翁又吉田矩方が兒玉士常の九州四國に行くを送る序の後に書きて曰く、
 余嘗聞之於亡友佐久間象山、吉田矩方者、近世奇烈之士也、如孤鶴橫秋、
 旻不可以雞群論之、後果以慷慨激烈、罹於奇禍、余深服故人之不欺我也、
 然未見其人、與其文、每以爲憾矣、今茲戊寅秋、兒玉君士常以矩方送序示、
 余、余讀之、議論激昂、文辭有奇氣、風采雄偉、足以動人、宜哉象山之蚤知其、
 人、而兒玉君亦夙受知於斯人也、語云、不知其人、視其友、豈不信哉、
 翁七十五歳の時、秋夜夢に竹枝を聞き、舊遊を回憶して感慨に堪へず、乃ち歌を作りて曰く、
 鄙人本是山中客、
 回首信山萬里隔、
 思歸夜聽竹枝歌、
 秋風起兮白雲多、
 鴻雁千飛促鄉思、
 濟世未酬當年志、
 長橋之蛟南山虎、
 夢裏揮劍如風雨、
 猿叫鹿鳴峻嶺邊、

喬樹擁雲々衝天、

吾來廿三今七五、

裘葛幾年不堪補、

方今英髦各競才、

誓期青紫隨手來、

嗟我日暮途更遠、

淚痕沾襟徒懷憤、

曲終衾冷風蕭々、

竹枝一夢魂欲消、

以て翁か少時既に濟世の志あり、雄心豪氣者て益壯なるを見るに足れり、翁嘗て徳川氏に仕へたるを以て明治維新の後に至りても敢て舊恩を忘れず、忠義の心鬱勃の念、往々詩文の中に顯はる、北戰錄題詞に曰く、
 君辱臣宜死、
 畏死何坐視、
 八萬狗鼠情、
 附賊視不耻、
 維時慶應戊辰年、
 烈士誓死氣勃然、
 陷城誅賊祭烈祖、
 將掃妖氛訴九天、
 二百餘年贊皇風、
 嗚呼創業誰之功、
 食毛踐土知耻者、
 盡忠所事是真忠、
 君不見山口城邊悲風急、
 良狗已烹寒天日、
 又不见肥筑州中勤王卒、
 血食不祭鬼神室、
 正邪混亂說續紛、
 當時誰秉董狐筆、
 大沼枕山此詩を評して曰く、有此真詩、史不復煩董狐矣、川田瓊江の評に

曰く、悲痛惻怛、情溢乎詞、世之忘恩遺義、炎涼變志者、讀斯詩、當報然愧死と、
桀狗堯を吠ゆるの譏を免きすと雖も、其主に忠なる精神に至りては、利
害に由りて節操を變ずる者と同日に語るべからず、これ翁の烈士と稱
し感歎已まざる所以なり、亦以て翁の心事を察するに足れり、
余橘黃年譜を閲するに、大風暴雨の厄、霖旱凶荒の難、外兵の清國を侵掠
し鐵艦の我邦に來航し、或は忠義の士毒網に罹り、或は姦佞の臣天誅に
伏するか如きことあれば、一々之を詳記し、或は當時の實見を記し、或は
支那新紙の報する所を録し、慷慨悲憤の氣往々筆端に迸り、暗啞叱咤す
るの概あり、而して時勢の逼迫に當りては、翁も亦自ら政治の舞臺に立
ち、或は獻白をなし、或は議論を圖はし、或は自ら斡旋盡力せり、今左に其
一節を録し、以て、全豹を概見せしむ、
明治元年戊辰、

正月三日の事件を熟思するに、固より我前君の失策によると雖、其

亂の根基は、長州に在りとす、其初外國相迫り、幕庭開鎖の議論一定せ
ず、閣老佐倉侯等假條約をなせしとき、家臣永井雅樂なる者をして開
港通商の事を説かしめ、世子長門守屢登城して其事を懇懇し、後和親
互市の議一定するに迫り、俄に攘夷の議を唱て京闕に迫り、慷慨の縉
紳家を煽動して攘斥の令を布告せしめ、幕府其事に應せざるを知て、
天子を挾て諸侯に令せんと欲し、兵を擁して鳳闕を襲に至る、偶
會津の爲に事ならずと雖、退て益其論を主張し、英夷と一戦して竊に
和を入れ、内援を頼み、又薩州を賣て英と戦はしめ、乃英に和睦せしめ
て遂に兩國志を合し、近國の諸侯西洋に甘心するものを合従し、幼弱
の天子を擁して討幕の策を成就するに至る、是攘夷は表向にして
内實は外國と和親して幕府を征討するなり、又其臣桂小五郎(後木戸
某と變名す)等の激徒をして薩臣を誘引し、水府慷慨の士をして激動
せしめ、元老彦根侯を誅して幕府股肱の勢を殺き、事を蕭牆に起て竟

に天下瓦解に至らしむ、乃祖廣元は公孫の裔を以て、朝廷衰微の政を輔けず、朝典を負て鎌倉に走り、頼朝を勸めて覇圖を開かしめ、以て己の榮とす、其子孫は幕府二百餘年の恩義を棄て、朝廷を擁し、萬國と和親互市し、己が國を利せんとす、前年開港の獻言果して是耶、今日攘夷の口實果して非耶、其祖其孫の心曲表裏、反覆測るべからず、千載の下董狐之筆あらば、其時如何書すべきや、

翁が徳川氏の爲めに盡力せしめ、徳川氏の將に亡ひんとする際に在り、明治元年三月朝兵進みて品川に次し、事將に測られざらんとし、人心恟々都下荷擔して起つ、是月十日、翁當直せしに、坪内伊豆守命を傳へ、老女局を携へ、天璋夫人の書を帶ひ、駿府に趣くべきの命あり、乃ち翌日直ちに發程し、十二日川崎驛に於て薩州兵の隊長相良治部に接す、幾くもなぐして參謀西郷吉之助も亦至る、乃ち夫人の命を傳へ、其書を渡し、且つ一書を作りて之を西郷に贈れり、西郷之を諾し、即時駕を返し、駿府に在

る有栖川總督宮の許に赴けり、翁ハ其旨を反告せんと欲し、老女と共に品川驛に退き、十三日西城に着せり、此行両後宮并に本壽院より金及び諸品を賜ひ、十五日閣老より命を傳へて功勞として時服二領を賜へり、以て翁が當時苦心盡力せし概を見るに足れり、後十餘年書を勝安芳に呈して當時の状況を陳べて曰く、

戊辰之事豈忍言哉、當時余承乏在後宮醫局、和宮及天璋大夫人日夜焦心苦慮、事係社稷、非一夫之所能、後奉內命使總督宮、始知其大旨之所在、今讀公之日札、而當日之艱難、諸臣惋怛、歷々如在目、一讀一淚、不勝感憤、因願公是當今之良臣也、幕府累世之臣子、孰不思忠、或憤死、或獲罪於朝廷、或前後錯方向者、不少、公獨爲社稷終始全志、魏徵曰、願俾臣爲良臣、母俾臣爲忠臣、是公之謂也、余雖方技之末、不忍見當日之艱難、竊呈書於先鋒及田安公、以訴微忠、今藏在篋笥、越俎之言、雖不足採、臣子之情態、亦可憐而已、伏冀鑒察焉。

與西鄉參謀書

亡國微臣淺田惟常昧死再拜謹奉書 大總督參謀西鄉君執事伏惟
皇上御宇如日中天舉千載失墜之政典修萬邦協和之禮儀將富國強兵
以冠於坤輿苟居王土食王粟者皆可不欣欣然奉戴此盛事也哉特惟六
師東征之日浮浪或抗其先鋒侯伯或矯其勅旨薄海震驚戰爭無止時
死傷載塗田野荒廢民疲於奔命加之天下金穀糜爛人牧不能庇其臣子
臣甚恐一朝有事則何以得奉 萬乘於富嶽之安鎮蠻醜於滄海之濱焉
哉是固雖廟堂諸賢之所定議劃策而非草莽淺識之所窺測竊察其所由
吾 邦上古無爲垂拱而治此爲不言之世降至於中古禮文漸開自簡而
繁自文而華眞率化爲虛飾質直變爲詐譌從是天下多端遂爲戰國政權
移于公卿歸于武將 王室不絕如縷厥後眞人一出尊崇 王室匡合諸
侯雖偃武修文奏廓清之功猶不失馬上得天下之風是以政刑簡易爲近
上古垂拱之治而昇平二百餘年政權煩雜尾大不掉加以外夷之覺隙而

中外紛錯墮綱紊紀宜乎神兵天降電戈一指而人情波駭大勢挫衄都城
失守諸侯瓦解以至於今日也雖然其君非有桀紂之暴其臣非有莽卓之
惡其勢自然而然而執事願察其自然之勢省先聖速成之箴行政以德化
民以仁則不刑而自威不戰而自勝是所謂王政之上乘兵略之本計也若
愈征愈戰橫羅荼毒者枕骸遍野懸首盈竿天下無寧日四民生怨嗟則雖
有百善政豈得能行哉孟子曰不嗜殺人者能一之兵志曰國雖大好戰必
亡謂此也夫王者父天母地子萬民歲終錄大辟囚惻然爲之素服減膳徹
樂豈亦忍窮兵黷武棄億萬生靈於鋒鏑之中乎今執事抱非常之材處有
用之時挾得爲之勢宜審古今政權之變態與民心之情實而不恃於萬邦
公平之法六師振旅以行王道興太平則天下沐 皇澤萬民歌康衢 皇
基安如磐石可引領而望焉嗚呼聖世難逢盛典尤不易覲臣大欣王政之
復興亦深慨生靈之死亡區々之情不能已於懷爰冒瀆斧鉞之罪以聞執
事冀諒焉惟常昧死再拜敬白

奉黃門田安公書

駿州醫員某死罪頓首謹奉書田安公閣下宋蘇軾曰遇事有可尊主澤民者便忘軀爲之禍福得喪付與造物某自幼少讀書識字深信此語當時以爲得一仕主則服此一言足矣年過五十始蒙選擢入侍君側時前大君西征嬰疾客死於阪城而不得一言表心吞聲咽愧徒奉靈柩而還自後國家多難遂至今日以爲亡國流離之臣吁嗟何其臣之不幸至此極也猝聞天朝有命大君新承統主持宗祀然髻亂妙齡未由咫尺執奏此臣之所以不得不拜趨獻白於閣下也抑閣下以嚴父之尊輔翼宗家上下一致政綱更張則二百餘年天下治安之德光亦將再輝矣臣竊謂開闢以來未有如神祖休明之治盛且久者而又未有失天下之速且急如今日者則神祖在天之靈其謂之何天若不厭棄其德亦未必福佑社稷而不光啓中興之主也然而今觀當路諸臣有欲爲國雪冤而扼腕切齒者有欲得時回復而忍恥吞垢者有賣國保祿佞人全己者有付國家存亡於度外而儉安送生者

此四者忠邪之跡顯然無隱閣下請審之驅邪拔忠喻以利害激以節義內以興休養之政外以講禦侮之策則神祖之德可輝而天下之望可取也今以天下之多士勒爲一國之臣子其難蓄養固不待論然以此意導之則臣庶皆知方向而天下之精銳亦可致也若夫移封易俗最其所難而古有遷都之帝今有就封之侯苟擇其善者而從之舉其弊者而祛之簡易便捷不困民生則不出十年而國家可蘇息也亦因循苟且如宗家昔日之爲則負媿於神祖結怨於人民受侮於夷狄不徒祖宗之鬼不血食皇國之正氣亦將漸滅矣此乃臣多年尊主澤民區々之念所謂忘軀爲之者閣下幸赦僭越之罪萬一有所採擇禍福得喪固非所敢期謹以俟命某死罪頓首敬白

奉島津左相公書

常謹白伏惟國家維新以來七更裘葛而基本未立政令朝出而夕止局制夕定而朝變黜陟賞罰反覆無窮加之外有吞噬之夷內有嘯集之民內外煩擾人心恟々天下皆望賢相之出若大旱之於雲竟然時聞閣下登台鼎

握天下之大權、衆咸欣々然相語曰、大賢當途、他日蘇息我者必斯公也、常則獨嘆曰、今時其何時、犬羊亂群、羶風扇世、而以大任屬公、苟自非簡法重令以澄其源、崇禮定制以齊其俗、立綱目以節浮費、揭專務以廢虛文、嚴政條以核名實、則不足以慰天下之望而使民欣々然也、昔以周公之聖、立明堂聽天下、而召公惑之、降如寇萊公、范文正公、皆明通公溥之君子、而不能又立朝者何也、望高事大、妬忌紛拏、奸詐百出、擠其後也、宜乎召公之致惑焉、方今聖主聰明英達、雖如周公之於成王、無不容納、然所憂者閣下唯一人而已、若得召公若其人者三五人、贊助之、天下望之、屹然若中流之砥柱、有所恃而不恐、則國家或可扶持焉、抑國家忘中興之鴻業、而懷偷安之心、士大夫狃于腥羶之夷、而以漁利爲時勢之當然、此已失之基本、誤之事實、乃所以政令屢出而不能振、局制數變而不能復治也、伏惟閣下抱不世出之才、立於天子之下、百官之上、其深謀遠慮、固非常小人之所測知、然天下之勢如峻阪、人情日下、而公之望益高、其地危如累卵、大任一去、國體大傾、則不可復收正、宜速登俊良、黜庸流、總攬衆戈、經略世務、噓死灰於復燃、迴狂瀾於既倒、以莫使民之欣々然者、更爲悒々然也、是常之所以區々獨爲嘆息而遂忘狂瞽以觸冒威尊、惶恐無他、伏俟鈇鉞之罪而已矣、常死罪頓首。

第九章 永逝

翁は容貌魁梧、氣魄雄絶、而して身体極めて健康にして、老年以後殆んど疾病に罹りしこと少く、耳目も聰明にして、終身一たびも眼鏡を用ゐることなく、八十の頽齡を以て日に病者を診察し、餘力尙ほ筆翰を擲りて後芻言の一書を著し、詩文を作爲せり、然れども歲月の慘酷なる、人生を驅りて絶壁に向はしめ、争ふべからざる強力を以て、之を千仞の壑に投せんとす、而して翁も遂に人間の運命を免るゝこと能はずして驅られて絶壁の巖上に立てり、翁の實に明治二十七年二月十五日を以て疾を

得、翌日病床に就けり、翁ハ自ら其起たざることを知り、強力に抗するの無益たるを以て、服藥を欲せず、天命の自然に放任せんことを決せり、其服藥せしハ、生を求むる爲めに非ずして、其家人の自然の情を慰むるが爲めなりき。

翁ハ信山の一茅廬に生れたり、而して父祖の箕裘を繼ぎ、仁術を修めて幾十万の人命を救ひ、幕府の侍醫となり、青宮の尙藥となり、醫官の寵榮を極め、海外諸國の公使を療して名聲世界に聞え、餘力筆墨を弄して著述身に等しく、詩文も亦世に傳ふるに足る、人生の能事亦畢きり、翁が死生の際に臨み、自若として心を動かさざりしも亦宜なりと云ふべし。翁ハ從來圓頂にして毎週必ず剃髮するを常とせしが、今や疾を努めて剃髮せしめたり、家人後頭部に觸きて病勢を激せんことを苦慮し之を諫止せしに、翁ハ叱して全部を剃髮せしめたり、翌日嗣子恭悅に墨を磨せしめ、門人唐澤養民に命じ其胸部に「寂然不動」の四大字を書せしめ、被

布を着して曰く、用意己に整へりと、寂然不動居士といハ、翁の名號なり、初め門人等相謀りて地を谷中天王寺に卜し、巨巖の上に不動尊の石像を安置し、成田山新勝寺主原口照輪師に開眼せしめたるが、病漸むに及びて其嗣に謂て曰く、葬儀ハ簡にして且つ質素なるを要す、造花放鳥の如きハ、余の好まざる所なり、余ハ唯被布を着し、傳家光國の短刀を握り、第二世不動尊として石像の下に葬らるれば可なりと、翁ハ又遺言して曰く、喪に居るが爲めに施治を止むるは余の志に非るなり、既に三日を経過せば、直に治療に従事し、殊に貧民の爲めに施藥せよ、こゝに余に對する供養なりと。

翁ハ病中一たひも苦悶の語を發せしことなく、食事ハ必ず起坐せり、疾益急なるに及び、家人に謂て曰く、愉快なり、壯快なりと、これより後復た一言を發せざりき。

翁ハ病中豫言せり、曰く、人間ハ唯元氣のみ、余は此元氣を以て死期に臨

むべし、余ハ先考の命日に非ずんば如何なることあるも決して逝かさ
るべし、萬一此日に死せずんば、必ず先師中西先生の命日に歿せんと、翁
ハ盆梅一株カ火爐の力を假りて二三輪の蕾を破りしを見、幽興頻りに
動き、辭世二首を口吟し、高弟黒岩靜山に命じて之を筆寫せしめたり、其
歌に曰く、

この花の大和心を失はず

咲きかへりても貫かんとぞ思ふ、

春といへばいつこの花もときめくに

おはきてかへる人のあはきさ、

先人の命日は來れり、翁は益絶壁に向ひて進めり、既に其縁邊の巖上に
立てり、死の神魔ハ翁を招くこと愈急あり、春風ハ吹て四郊の野に滿つ
れども、絶えて幽壑の底に來らず、慘澹として力なき夕日ハ西空に没し
たり、幽絶なる晚鐘は人生の無常を報せり、夜は彌漸めり、一絲の光線も

復た幽暗を照さず、夜ハ已に死せり、萬籟沈みて天地寂寥なり、翁は自ら
合掌せり、哭聲俄に起きり、翁ハ遂に永遠不歸の客と爲れり、實に三月十
六日午後九時四十五分なり、享年八十一、事畏くも九重の上に聞えけれ
ば、祭祀料として金二百圓を下し賜はり、東宮殿下よりも金百圓を賜
きり、翁もし知るあらば必ず天恩の優渥なるを感泣せしならん。

翁篋を易ふるの七日、即ち二十二日を以て葬儀を執行せり、正にこれ中
西先師の命日なりき、是日會葬せし者ハ、細川黒田の二侯爵を始め、華族
醫師紳士其他門弟及び恩顧を受けし者凡そ七千餘人あり、以て翁カ多
年徳望の深かりしを見るに足れり、午後一時横寺町の本邸を出棺すま
ば、近隣の肆塵ハ業を休みて店頭に香を薫せり、又旅裝せる翁媪の路傍
に蹲踞して膜拜せるもの多かりき、蓋し郊外の野人カ傳聞して葬儀を
來觀せるものなりと云ふ、翁の治療に於ける、人爲の域を脱して殆んと
神悟の境に達せしを以て、地方の農民の間ハ相傳へて翁を以て蛇の

子なりと稱せり、これ翁の父嘗て兒童か兩頭の蛇を捕へ之を殺さんと
するを見、金を與へて之を購ひ其生を完うせしに、後數日一婦人來りて
炊爨の役を執らんことを乞ひ、翁を生むに及びて蛇に化して去きりと
云ふに由る、齊東野人の語なりと雖も、こゝに由りて以て地方人民が、翁
を信仰せる一斑を見るに足きり、其路傍に膜拜せるが如きハ蓋しこれ
が爲めなり。

葬列の前にハ巡查二名先を拂ひ、生花造花龍燈提灯等を整列し、棺後に
ハ葬主遺族親戚知己門生等隨從して悽愴なる樂を奏し、徐々神樂坂を
下り、左折して河岸通を過ぎ、本郷丸山の本妙寺に着す、路上馬車人力車
等絡繹して絶ゑず、道傍觀る者堵の如し、其盛なること貴顯の人と雖も
多く見ざる所なり、奏樂の間に、岡田昌春、太田正隆ハ柩前に進みて祭詞
を讀み、次で讀經奏樂等の式あり、四時に至りて全く其儀を畢り、谷中天
王寺不動尊石像の下に葬れり、當日讀みたる祭詞ハ左の如し。

祭栗園淺田先生文

維明治二十七年三月二十二日、岡田矩謹以清酌庶羞之奠、祭栗園淺田
先生之靈、吁嗟先生、起身信之栗村、爲泰爲斗、斯道自尊、死而不死、氣充乾
坤、靈氣猶存、孰爲茲語、衆庶之言、人有耳目、予亦奚論耶、天之所與、極其道
源、予昔採芳躋壽之園、雖匪執贊、得窺其門、初見何時、嘉永紀元、一持笑鬢、
識非常人、當時執鐸爲劉樂真、忽諸長逝、莫由問津、先生代之、屹々自持、遇
予踰他、弗以無似、予亦私喜、以爲得良規、先生清濁、抱一多年、學殖有據、議
論有淵、大道坦々、不執不偏、旱雲油々、其信益周、予亦賴之、四十春秋、今既
亡矣、永訣悠々、一言欲吊、竟不可酬、仰指彼蒼、白雲叵留、俯顧其業、卓然不
朽、神乎護之、冀傳永久、氣運消長、與時沈浮、自古如是、予復曷尤、呈誠設祭、
非有所求、嗚呼哀哉、尙饗。

明治廿七年三月廿二日

辱知 岡田昌春九拜

祭栗園淺田先生文

嗚呼、先生逝矣、天下之抱病者、其就誰而治療焉、嗚呼、先生逝矣、吾黨之講業者、其從誰而質疑焉、嗚呼、先生逝矣、今而後唯明吾道、而傳吾術者焉、嗚呼、哀哉、先生一去、而道山悠遠、豈唯曠日西沒、而暗夜燭滅也哉、吾心鬱結、吾淚滂沱、吾哀無涯、而吾言不成、文、跪焚香以告。

明治廿七年三月廿二日

眷願生 太田正隆泣血敬白

翁は身後他人の手に成れる諛墓の文を喜はず、自ら其生涯を叙して實を傳へ、門生等か生前原口照輪に請ひて作りたる聖無動尊像の銘を以て其墓誌銘となせり、其碑銘、並に自叙傳は左の如し、
寂然不動尊碑

余嘗讀宗伯淺田先生之傳、慕其風采奮矣、昨壬卯五月、適過小院、辱傾蓋之厚誼、爾來先生、進德大業既成矣、受其業者、唱仲景之道、以復其舊、先生之功、可謂偉矣、今茲先生、歲六十六、門生集議、請刻聖無動尊之像于石、以傳將來、事已決、託銘于余、余謏劣、不敢當、固辭不允、聊塞其責耳、抑此舉也、必自由焉、易无思也、无爲也、寂然不動、感而遂通天下之故、非天下之至神、其孰與於此、夫道以性善爲宗、以無心爲入門、以不動心爲實地、以時中爲妙用、故無心、非滅沒之謂、以心斯役者、烏能得半日之寂、無心之境乎、况復不動而動、動而不動、一髮難容、奚假安排乎、蓋人者一小天地、而識所以治人、則識所以治天下、其故何歟、天下萬殊而歸一本、莫適不當也、嗚呼、處今之世、行古之道、寂然不動者、非先生而其誰歟、非先生而其誰歟、
銘曰、一睨鎮魔界、天高月亦清、
明治十三年歲次庚辰七月上浣

栗園自序

原口照輪撰

余先世源賴光五子乙葉三郎賴季、從攝津遷信濃、其子孫住筑摩郡內田

鄉淺田莊因以淺田爲氏累世屬木曾氏木曾氏亡而屬小笠原氏皆以爲信濃源氏之族也高祖某桔梗原之役爲武田氏戰死時有遺孤乳母抱之匿於小笠原氏封邑栗林家臣從者僅四人迨德川氏霸天下以閱閱賜宅地五區主從居焉世以農爲業祖諱式藏號東齋幼有才氣善文筆兼通醫藥之事爲鄉人稱配百瀨氏生四男一女長爲先考諱惟諧字惇篤以字行號濟庵幼從松本儒員木澤天童學經義又就堀內桂仙修醫術其業頗行娶橫山氏舉四男三女余以文化十二年乙亥五月二十三日生於栗林邑幼名直民後改惟常字識此人稱其所生日栗園遂以爲號余生質雖健性魯鈍幼受孝經論語詩書句讀於先考又從木澤天倪學左氏文選猶不能解其義師卑之年甫十五得物茂卿徂徠集其文佶屈孳牙困苦讀之又與儕輩輪講戰國策艱澁難解因把史記列傳參照據評林說稍得省悟然志氣與凡童異有間則讀稗官野乘慕古之豪傑將有所卓立祖母豐孺人在側亦嚴責之後出遊高遠藩學醫於中村中傑尋入京師主中西氏家與吉

益川越二家門生研究傷寒論餘暇徧訪名儒宿醫聞其緒論略通大義歸鄉將成一家辭先考出於江都初開業困躓危苦三年世無知余者有人延余謁醫官本康宗圓君君一見曰子篤志溢眉宇宜選其人請益因介多紀菑庭小島學古喜多村栲窓三先生得師友之助而業稍行時先考嬰傷寒病危劇告急於余余侵晨戴星奔馳至於鄉則一日前先考既逝矣余慟哭不知所爲慈母泣曰家君臨大漸親戚問汝事家君曰渠有志余不敢言據此言則家君不幸遽下世雖昆弟笄々孤露汝能早自樹在率勵諸弟敦勉刻苦立汝身耳余聞之益銜恤飲恨懊懣不能安肝腸欲爲裂居喪數旬斷然曰將立身行道而至此極當逆其孝一揚名顯親以面于先考於地下於是托祖母慈母及二弟三妹於親戚還江都晝夜勉勵節用省費有餘贏則贈之於鄉里以慰老親後數年弟妹各得其所墓田相償焉余在都下觀世醫張門戶者講學者徒事經義訓詁而不精於治術專治療者膚淺無學殖術媚世不仁亦甚矣因歎曰醫之失傳久矣漢之醫經々方漸微趙宋

以來、脉病證治之學不講、故後進不得其門而入、學術分鑿相馳、余將更張斯道一之、乃做陳無擇嚴用和及大醫局程文、先著脉法私言、以審氣血先機疾病進退死生之辨、次著傷寒辨要雜病辨要、以辨病情病機病之原委、因由、著傷寒雜病辨證並險症百問、以辨症之陰陽表裏虛實寒熱真假合併、著傷寒翼方雜病翼方及古方藥議、細論治方之運用化裁、與藥性之合和効用、於是治術之成規一定、課業有階梯、門人大進、各得成業、又謂醫道之壞、久於異端、而爲我道之楊墨者、莫西洋若也、著原醫警醫紀事西醫指要內科闡微私評等、以辨駁其說、幕府之末、屢有征伐之事、著行軍備要、以補洋醫之所不知、又瘟毒利流行、世醫爲霍亂治之、死者如麻、乃著治瘟編、以論其爲熱厥、活人最多、此病頻年屢行、洋學之徒、以溫度器測之、始知其爲熱毒、大服我見、嘗慨皇國醫傳未備、術業之精、治績之懿、性靈之美、廣甄博采、勒爲成書、名醫傳前後編、先哲醫話杏林風月是也、後官有命、贈醫傳於米利堅學校、又清使張斯桂、收醫話於四庫、世以爲國榮、先是十餘年、醫

術頗行、諸侯聞其名、將聘之、一切謝絕、以奮勵其學爲任、特笠問侯、巖邑田侯、贈廩米以爲學資、安政二年、幕府命校醫心方於躋壽館、賜白銀二錠、越三年、閣老關宿侯、傳命謁、昭德公以爲徵士、越四年八月、佛國公使列翁魯有病、衆治無効、請名醫於幕府、衆議以臣常對、使參政敦賀侯率常療之、不日奏効、官賞賜白銀二十錠、佛國帝亦謝以自鳴鐘及羶羯、慶應二年、丙寅、昭德公在大坂城疾病、急命擢侍醫上診、至則脚氣腫滿、將上攻衝心、因疏衝心候五條、呈閣老、果如其言、還江都、命爲、天璋晴光本壽三夫人執匕、賜世俸三十人口、廩米二百苞、位叙法眼、當幕府傾頽日、又奉、和宮及天璋夫人之命、謁、總督宮、請江城鎮靜事、得允許、城下之民以安、枕席乃賜章衣一襲、余雖乏學識、每慷慨憂世、當幕府末路、與執政之士、屢論時事、動輒扼腕、誰何、既橋侯、川越侯、吉井侯、及川路左衛門、水野筑後、小栗上野、黑川近江、井上信濃、佐々木信濃諸君、深締交、終始不墜、其志、其他如藤森天山、羽倉外記、林鶴梁、佐田介石、苟有憂國者、無論縑素、傾蓋如故、所獻

言數通、今僅存贅談一篇而已、明治四年辛未、辭執匕、卜居於牛籠、將隱栖樂餘年、而荷病請治者、履常盈戶、清國及朝鮮使節、來我邦者、以受余診爲例、明治十二年己卯、早蕨典侍有姪、使臣診之、皇子明宮降誕不豫、乃命臣爲尙藥、歲賜金千圓、官絹四匹、叙從六位、繼之花松典侍有娠、誕滋宮、隔年又誕增宮、命臣爲尙藥、十六年八月、兩宮俱罹胎痢、臣知其不可爲固辭、兩宮果崩、臣乞骸骨、上憐其誠實不允、感激涕零、遂不揣年老、每月一次會同僚、研究保嬰治法、以著養幼新編、余素生於僻邑、乏良師友、加以識陋學淺、如經義不能深討、但以踐履實行爲要、每教門人讀論語、醫則以傷寒論爲主、蓋此書亦實事求是、與魯論其旨相近也、如文辭固刀圭餘暇、不能深學、其所感慨發揮、則搦管直抒己之所欲言、苟足以達而止、人或非笑其著、至大罵、則益喜自負不省也、至詩則其格調聲律未嘗學、方酒闌興到、天真爛漫、衝口賦詩、自謂風中之竹、石間之泉、風行鐸鳴、自然成音響、豈用規模修飾哉、然昔遊海鷗嚶々二社、人嘉其志、以

爲洽歡、但如醫則寤寐不能忘於懷、人之沉痾痼疾、如已有之、潛心湛思、欲盡其術、日夜手不釋卷、日知其所無、月行其所知、是吾志也、又深嘆我道之衰、府下諸縣說病院、使門弟子救衆人疾苦、近來海內有志之士、聞此舉而興者有焉、余愉快可知也、海內亦受吾業者數百人、中稱高足者、合志戮力、以明治十四年、卜余壽藏於東台中、使成田山默堂師記其顛末、名曰寂然不動、余能事雖畢矣、猶有餘命、且以一個諸生、名聞海之內外、一膺幕府徵擢、再蒙青宮寵遇、千載一時、感沐曷勝、雖自愧不文、聊追述其生平、而示之於兒孫、以當年譜云、明治乙酉春日、栗園老人書於牛渚耕耘筆研齋中、時年七十一。

明治廿一年五月、叙從五位、賜終身年金千圓、在作此序後四年、叙中故不及。
男 淺田恭悅謹識

第十章 性行

翁の性行を論せんとすまば、一言以て之を蔽ふに足る、曰く純然たる信州人の性質を具備せりと、翁が先人遺す所の日本刀を裝する作に曰く、百戰光芒今赫明、遺刀私自比干城、一宵驚覺鯨濤夢、

枕上蛟龍躍有聲、

翁が身の刀圭の業を執ると雖も、心の刀劍の嗜好を忘まず、尙武の氣象胸襟に鬱勃たるを見るに足れり、而して翁が自ら頑なること石の如くと評せしめ、亦信人強情の性質を享けたるものに非ずや。

翁の性質が剛強不屈なりしこと、之を少時の勤學に見、之を壯時の著述に見、之を臨終の状況に見、之を平生の行爲に察するに、皆其梗概を窺ふに足れり、翁の中年以前に於ては往々讀書夜に徹し、机に憑りて雲時の眠をなすに過ぎず、帯を解かざること數日に及ぶことありしと云ふ、耳順以後八十に至るまで、鷄鳴必ず起きて書齋に端坐し、蠟燭を点じ坐側に線香を焚き、書を読みて之を抄録し、文を作り著述をなし、一枝燼滅

して天漸く明く、乃ち温水を以て盥嗽し、頭上より四肢の末に至る迄、之を淨洗し、冱寒風雪の晨と雖も嘗て怠ることあらず、漑濯畢れば復た書齋に坐し、日記簿に前日省診せし患者の處方を詳録し、廻診簿に本日廻診すべき人名を記載して之を門弟に附し、朝饗了れば午前九時を以て診室に就く、患者輻輳して門内より堂上に填滿し、殆ど立錫の地なきに至る、凡そ毎日診察を請ふもの二百數十人に下らず、世醫の誤治に由りて壞症に陥りし者皆來りて救活を蒙り、沈痾懸隆にして世醫の治方に窮するものも亦來りて回生の澤に浴す、翁は此間堅坐して曾て倦怠の色を見さず、午后二時若くは三時に至り漸く診視を了れば、裝束して輿を命じ、四方の患者を省診す、而して輿中必ず書一帙を携へて之を繕閱し、一たび目に觸るゝ所は、終身遺忘せざりしと云ふ、翁の平生の行爲は常に此の如く、十年一日嘗て毫釐を違へざりき、堅忍不拔の氣象あるに非ずんば、安くんぞ此の如きことを得んや。

翁の京都に遊學せし間ハ、非常なる艱苦を嘗め、迂に説教して筆墨の資を得、塵棄所に求めて下駄を得たるが如き、他人の堪えざる窮厄を經過せり、其後醫業を江都に開くに及び、開業三年の間は、人に知られずして門前雀羅を設けんとする状あり、當時蚊帳を欠きて夜半に至るに睡眠することを得ざることありしと云ふ、而して父の家山に歿して家は東都に焼けたり、此際祖母慈母及び二弟三妹を親戚に托し、再ひ江都に還りて業を開きたりしが如きは、百折不撓の精神あるに非ずんば、安くんぞ此の如きことを得んや。

翁は其業を以て天職となし、嘗て之を忽略にせしことあらず、開業當時の納幣簿に題して天職處執事と記せり、其年既に七十に及びたる後も、毎朝患者を診察して嘗て怠ることあざりしかば、其男恭悅翁に少しく休養せんことを勧めたりしに、翁聽かずして曰く、子等心を持すること此の如きは、大に誤まり、既に聖賢の書を讀み聖賢の心を以て心とし

て病者に接せば、一人も多く治療せんことを望むは當然のことに非ずや、然るに懦弱此の如くんば、安くんぞ天下の名醫たることを得んやと、依然として業を執り、臥蓐前日迄患者を治療せり、其子弟を戒飾する語に曰く、苟も勉強余の如くんば、宗伯たること決して難からず、唯眞に余を學ぶものなきを病むのみと、其自負するもの常に此の如し、敢て放言に非るなり。

翁の身を律すること極めて嚴正にして、ストイック派の哲學者に似たる所あり、翁は如何に遅く眠に就くとも、毎朝必ず鶏鳴に起きて點燈讀書し、如何に疲るゝことあるも、曾て午睡を貪りしことなく、如何なる嚴寒と雖も家居の間足袋を用ゐしことなく、小説戯作書並に碁將碁等は自ら之を手にしたることなきのみならず、門人に嚴禁して一切之を弄すること許さず、又外來患者に接するとき未だ曾て坐布團を用ゐしことあらず、假令人の勸むるあるも、斷乎として之を拒みて曰く、外來寒

風を凌く病者の心を思はゞ、家居安座して何の寒きことあらんや、此の如くにして安くんぞ醫師たることを得んやと、其一旦座するに及へば、儼乎として巖の如く身をも動かさざりき、此の如くにして争ぞか醫師たることを得んやの一語は、翁の常に門生を戒めたる警語なりき。翁は天性果斷にして、事を斷すること流るゝが如く、已に一たび斷じたる所は、復た回すべからず、其病者に接するも亦此の如く、一旦措劑を定むれば敢て漫りに方を轉せず、絶危絶險の地を踏みて起死回生の奇勳を奏せしこと、其幾回なるを知らず。

翁は極めて自信の心に厚く、一旦診察して病症を定めたる所は、百喙交説するも岸然其説を持して變ずることなく、門人等が時に代診して翁の處方を變ずることあれば、大聲疾呼して之を戒めて曰く、病機を認めずして我か處方を改め濫投するものは、庸醫の流なり、我門之を容れずと、其將軍を療じ、皇子皇女を療せし際にも、堅く其見る所を執りて一步

も退讓せず、明宮の尙藥奉御たること五年、命あり曰く、明宮に違例あらは、宜しく侍醫と相謀り以て其治方を盡すべしと、侍醫は皆洋醫なり、翁これを屑とせず、書を香渡晉に呈じ、職を辞して曰く、夫れ道同じからざれば、則ち相爲めに謀らず、况んや東西の兩洋風土人情も各異にして、治術藥法も亦自ら同じからざるおやと、翁は之に專任擔當せしむるに非るよりは、其平生目して夷狄の道となす所のものと相謀ること能はざるなり、翁の尙藥奉御を辞じたるはこれに由れり。

翁は自ら奉ずること極めて薄くして、嚴に節約を守りたり、恰も奢肆を敵とし質素を友とせしものゝ如し、他より來狀あるときは、親ら之を四方通信録に記し、其書簡袋を解きて其裏面に一切の用事を録せり、今日往々著書の間、於て詩を稿せる反古の書簡袋を見るにあり、翁の自ら詩文を作爲せしのみならず、又讀書の間、古人の名言佳句を抜抄することを好みしが、皆反古を用ゐて其背に録せり、今日存する所の詩文の近

稿は、悉く反古の裏面に存せり。其書に載せり今日、（？）の書文の或翁は外出の際は、格式なりとて衣を更めたりしが、家居常に敝褌袍を纏ひたり、翁は又極めて酒を嗜みて一合の「正宗」に聖賢味を樂みしが、厚味珍膳を好まず、常に淡泊なる野菜類を用ゐ、生魚生鳥を贈るものあれば、悉く之を放ち、曾て生物を屠りしことあらず、又鳥肉を食せしことあらずりき。（？）翁の居室は、三疊一間二疊一間にして廊下を以て本宅に接し、建築極めて質素なり、楣間に友人垣内霞峰の「戩穀」と隸書に書せる扁額を掲げたるのみ、庭前の樹竹は極めて清楚にして、詩情を惹き、幽懷を慰むるに止り、毫も華麗なる修飾あらず。（？）翁は自ら質素を旨としたるのみならず、子弟門人を率ゐるにも嚴に節約を以てし、門生中に疊表付の下駄を穿ちしものありし際には、翁が京都遊學中に塵棄場に求めて單匹の下駄を穿ちしことを語り、痛く之を

戒めたり、又家人中に紙片元結等を粗略にしこきを棄擲するものあれば、大聲之を叱して爾等は此製造者が如何に辛苦せしかを知らざるか何ぞ天物を暴殄するやと云ひ、叱咤の聲隣屋に徹せりと云ふ。翁は節約を嚴守せしか、畜財を謀るが如き鄙劣心に出でたるに非ず、單に奢肆を嫌ひ、天物を暴殄することを厭へる高尚なる心に出でたるものなり、是を以て其行爲決して世間の貪夫が火を爪頭に點じ金を土中に埋むるが如きことなく、豪放洒落にして往々經濟に迂なるをあり、翁は數學に通せず、金錢の勘定を知らず、酒間戯に余も全く算籌に通曉せざるに非ずと云ひて、口誦する九九は八八七十二、六六三十八と云ふの類なり、常に曰く、醫師は算數に通せざるを可とす、數學に通すれば、金錢を好み、貧賤を厭ふに至り、遂に藥價を要し、診察料を貪り、醫の仁術たるを忘るゝに至ると、翁は終始此主義を以て、藥價を要求せしことなく、立關に揭示して、藥價を問ふ者あらば、拒絶すべし、夫醫の仁術を旨とす、藥

價を貪り、診料を捻る者、商賈に劣るが故也と云ひ、病者が志を以て謝儀を致す外の、曾て薬價診料を要求せしことあらず、偶々薬價を問ふものあれば、色を正して曰く、余鄙陋と雖も、職の尙薬を奉じ、位は五品を辱うせり、豈に商賈の業を營み、賣買を事とするものならんやと、而して薬品は最も純良なるものを撰み、貧富によりて其等を異にせず、最下等なる饑寒窟の窮民に施すにも九重の雲裏に在す。皇太子殿下に奉ると同一なる薬品を用ゐ、同一なる注意を以て懇切に治療せり、又門人等か私に調薬を病客に與ふる如き、嘗て問ふ所に非ざりき。翁は醫を以て己の天職と爲し、古人の學説と自己の經驗とに稽へて、之を實地に活用し、沈痾痼疾の世醫か治療すること能はざるものを、一七の下に起し、一世の民をして仁壽の域に躋らしむることを期し、終始醫の仁術たる主旨を守りて、恩賜の終身年金並に富豪の謝金をは貧民治療の薬材に當てたり、明治二十六年中の統計に據れば、治療患者の數一

万四千餘人ありしか、此中全く施薬せしもの七千餘人なりき、以て翁の節約の吝嗇と異にして、義侠心に富み施惠を好みたることを見るべきなり。

翁の行爲、又往々豪放洒落なる所あり、翁か開業の當時名聲未だ揚らず、夏日蚊帳を欠き、竈突時に黔まさることありし際、二朱の薬禮を受け、四五日を経て又二分の謝金を得しことあり、細君は之を見て竊かに米薪の資を得たることを喜びしに、翁は笑て曰く、こゝ余の飲料なりとて悉く酒に代へて顧みざりしと云ふ、翁ハ殊に酒を嗜みて、壯時の酒量の二升なりき、門人稻葉道之戯に一日上酒五合の割として、明治廿三年五月廿三日迄の合計を調べたりしに、百三十六石四斗六升五合、馬上にて百七十駄餘となれり、翁之を聞き笑て曰く、こゝ宗伯が飲むに非ず、口が飲むなりと、翁は最後の臥蓐に、其嗜める「正宗」が一點も咽に下らざるを見て、死期の近けることを悟り、胸中決する所ありて、堅く服薬を拒めり、

男恭悦が不肖の服薬を勸むるは、慈心似たりと雖も、昔は文天祥の宋朝の頼運に當り、其遂に回すべからざるを知りしも、一日の運を永うすきは、一日國の爲めに盡さざるべからずと云へり、不肖の心事も亦是に同じ、假令天壽定るありて今日に竭くると雖も、争てか袖手傍觀して其死期を待つに忍びんや、幸に不肖の心事を察せよと請ふに及び、強て薬を用ゐたりと云ふ、翁は眞に酒を以て命となせし者と云ふべきなり。

翁は酣飲耳熱する後は、豪氣堂々として雄心勃々たり、嘗て酒後大橋訥庵と醫は仁術といへることに就きて大議論をなせしことあり、又遠田澄庵と脚氣病に就きて激論し、澄庵怒りて短銃を擬せしに、翁は直に之を奪ひて澄庵を壓伏せりと云ふ。

翁は酒落にして時に諧謔を發せり、一日夜歸りしとき、門人玄關に在りて露骨の行燈に對せり、翁の叱責に遭はんことを恐るたりしに、翁は懷然として曰く、袒裼裸程せる燈に對して自ら汚されんことを思はず、抑

も子の柳下惠を以て自ら任ずるかと云ひて之に酒を飲ましめたり、又一日本願寺門主に會見せし際、門主卒然人間の脉數を問ひしに、翁聲に應じて觀音經の語を引き、八万有四千脉と對へしかば、門主も其頓智即妙に感歎せりと云ふ。

翁は極めて豪放洒落なりしが、其中自ら精細縝密なる所あり、其一例に、翁は等身の著述をなせしが、皆細楷を用ゐ、曾て略字を書きしことあらず、門生中に略字を用ゐるものあまは、痛く之を戒責せり、其藥室を名けて勿誤と云ひ、小心翼翼として唯其過あらんことを懼れたり、謂つべし英雄の戦々兢々の裏より傲し出て來ることを、世人徒らに粗豪放蕩を以て英雄の本色となすものは、其表面の一端を窺ひて其心髓に透徹せざるものなり、又赤阪に住せし頃、風溼を煩ひしが、病家の招きに應じて遂に赤阪門を過ぎしに、擔夫の駕籠のまゝ入らんとせしに、翁聽かずして曰く、余今日に至る迄乗打をなせしことあらず、假令病むと雖も今

これをなすに忍びんやと云ひ、歩きて門を過ぎたり、其謹慎なること此の如し。

翁は天性至孝にして、毎月十六日は先人の命日に相當するを以て、必ず其畫像を掲げて齋戒沐浴し、線香一炷を上るを例とし、古稀の齡に至りても敢て怠ることなかりき、翁は又饅飽を好みしか、先人の嗜む所なれば、食する毎に先人を思ふに堪へずと云ひ、代ふるに蕎麥を以てせりと云ふ、其先人五十忌辰の作に曰く、

蕩地春風蕩墓田、

音容入夢夜難眠、

古碑埋字舊交散、

新政移風世態遷、

官路漸登階六級、

家園纔保屋三椽、

如今一掬招魂淚、

灑向重泉五十年、

想昔信山寒雨天、

匆忙歸去意茫然、

竟空終養安親志、

豈計爲廬守墓年、

身類雪鴻迷舊跡、

心如社燕寄他椽、

算來五十星霜夢、

轉對孤燈不得眠、

翁は圍碁將碁等の遊戯を好まず、又演劇角抵等の遊觀を喜はず、又決して蓄財の念なし、故に餘貯あれば、悉く書を購ひ、藏書の多き數万卷に及びり、而して獨り醫籍中に異書珍本容易に得難きものあるに止らず、儒書中にも貴重なるもの多く、經には十三經註疏、皇請經解あり、史には大日本史、二十一史悉く備はり、類書にハ、佩文韻府、百川學海、稗海、漢魏叢書、史籍集覽あり、此他詩文に關する書極めて多し、これ尋常醫家の書庫に於て容易に見ること能はざる所なり。

翁ハ守舊的精神甚だ堅固なりしが如し、翁ハ終身剃髮して、舊時代の醫風を墨守し、馬車人力車を用ゐずして、終身駕籠を用ゐて東都の市中を横行せり、こゝ實に明治唯一の現象なりき、又常に舊時代を回顧して、新事物を喜ばざる傾向あり、逆流的の人物を喜びて、痛く輕薄才子を嫌へり。

翁ハ西洋と終天の讐あるものゝ如く、一切西洋の事物を非難し、獨り自

ら洋書を讀まず、洋服を穿たざるのみを以て満足せず、病客門生と雖も、西洋に心酔し洋書を讀み洋服を穿つもの、之を拒絶放逐して、唯其汚されんことを惟れ恐るゝものゝ如し、其家規に於て之を表出して曰く、

家規

一華族新に請診之向、大抵謝絶すへし、何となれ、近來皆西洋に心酔し、其餘唾を舐るもの多きは也。

但し從來依頼の邸は此限に非ず。

一藥價を問ふ者あら、拒絶すへし、夫醫者仁術を旨とす、藥價を貪り診料を掠る者、商賈に劣るか故也。

但し病者志を以て謝儀を致す者、敢て拒むに非ず。

一塾生洋書を讀み洋服を着する者、速に放逐すへし、當家數十年、周の職を奉じ、漢の術を行ふ也、他書生と雖、洋癖ある者、出入を許す。但し其職にありて洋服を着する者、此限に非ず。

翁の西洋を嫌ひたる、國萃對外の思想に原くものに非ずして、一種の偏僻せる感情より發したるものゝ如し、翁の西洋人をは輕賤せしが、支那人をバ却て之を尊重せり、翁は洋書を讀む門人の放逐せしが、洋書の漢譯となり、若くは洋人が漢文を以て著せる書をバ、精讀して其書を批評し、或は自己の著述に引用せり、數万卷の藏書中一醫書の原書及び邦人の譯に係るものあらずと雖も、漢譯唐本の洋書の七八部を藏せり、蓋し翁の既に洋醫の勁敵たることを知れり、其實測窮理の學、高く性命の理を究むる外に、別に一地區を開きたることを悟れり、而して工藝器械に至りては遂に一籌を彼に讓ることを自覺し、其長を取り我短を補はんと欲し、和膽洋器の説を作れり。

然るに翁は詩を賦して曰く、

醫生求道要天真

蠻雨戎煙易誤人、

莫向泰西學裏去、

長沙淵上月清新

翁が既に彼を以て器械に長ずとなし、實測の學に達しとなし、長を取り短を補ふべしと言ひたるに關せず、依然として家規を玄關に掲げ、終始排外攘夷的の形を裝ひたる所以の何ぞや、余の敢て斷言するに憚らず、これ翁の剛情なるに由れりと、信州人の剛情なりと云へる交際場裏の公評の到底免るべからざる所に於て、余か翁を以て純然たる信州人の性質を具備せりと爲すの、これが爲なり。

第十一章 後 嗣

人生は一線の水流の如し、時に滙して湖沼となり、又蹙まりて急流激湍となる、而して其水流の清濁と廣狹と、一に源泉と注水との性質分量によりて定まるものなり、故に一人の生涯を叙するが爲めに、獨り其祖先を知るを以て足れりとせず、併せて其子孫をも叙述せざるべからず。

翁の父濟庵と母横山氏との間に、四男三女あり、翁の其長子にして、家を其長妹に譲りて別に一家を起せり、次子の夭死す、第三子の名を將相と云ひ、武を好み兵を喜び、少時軍學を攻め、後深井氏を冒せり、第四男の春三郎と云ふ、少にして醫を修め、穎悟人に絶せしが、年未だ弱冠ならずして歿せり、長女家を嗣き、熊谷啓琢を養ひて之に配せり、次女の三井氏に嫁し、第三女の埴田氏に嫁せり。

翁の東遊の初め、伯父佐久間氏を主とし、懸壺の後其女を娶りて二女を生めり、中林俊庵の次子柏壽を養ひて子とし、長女倉子に配し、別に家を起さしむ、次女を幾子と云ふ、日下林八に配して翁の祖乙葉三郎頼季の後を興さしむ、側室に二女あり、長を華子と云ひ、次を萬千子と云ふ、幼にして共に馬脾風を患ひて歿せり、馬脾瘧症編は、此際に成れるものなり、翁に二女を悼む詩あり、悽惋にして多讀に忍びず、其詩に曰く、

悼萬千子

舐犢老牛情可憐、
吹散枝頭花露妍、

呱々乳罷入懷眠、

寒風一夜真無賴、

悼華子

幾歲拮据纔作家、
至竟唐花即夢花、

一生事業等浮槎、

老來忽見唐花發、

亡兒百日忌辰墓下作

勁風暴雨勢難支、

五歲星霜梁一炊、

縹緲芳魂不復返、

孤蟾空照舊花枝、

柏壽は後に名を惟數と改め、字を子誠と云ひ、棕園と號し、通稱を宗叔と呼べり、天保九年十一月を以て常陸國笠間に生じ、年十六にして翁に養はれ、其薰陶を受け、漢醫の術を鑽研し、頗る得る所あり、年十九にして翁の代診をなす、文久三年醫學館の醫書校正を命せられ、勤務勉勵の賞として白銀を賜れり、後疾を以て仕を辞し、民籍に入り、金杉村に棲遲し、台

陰雜詩數十首あり、其一に曰く、

煙霞作趣都清幽、

嫩綠之春落葉秋、

姑避錦城絲竹地、

明治十六年皇女増宮の拜診を命せられ、明年居を日本橋區に移し、近縣數所に、出診所を設け治療に従事し、癩癩沈痾を起すもの頗る多し、後淺草に轉居し、其藥室に扁して活物窮理醫舎と云へり、是歲 明宮殿、下の拜診を命せられ、職を解くに當り、宮内省より金幣を賜はれり、爾來漢醫方を以て洋醫跋扈の間に立ち、其業を執り、
林八は賣藥を以て業となし、蘇合香圓及び澄涼丸を販賣し、又翁の發明に係る衛生懷爐灰を鬻ぎ、近日神涼湯、蠶紅丸、精神香の三種を加へたり、蓋し翁の遺方にして古方と經驗とに稽へて配劑せしものなりと云ふ、翁に男子なかりしかば、高安宗悅の第二子恭悅を養ひて子となし、翁の第三妹の長女鹽田氏を以て之に配し、其家を嗣がらむ、恭悅の名を惟恭

と云ひ、栖園と號し恭悅と通稱す、安政三年一月を以て北總香取郡扇島村に生る、父を宗悅と云ひ、世々整骨醫を以て業となす、俗に十三枚と稱するものこれなり、恭悅家學を受け、治術に長じ、病客の疾を齎し治を乞ふ者日に百餘人に及び、履屐門に充つ、其洋醫の治を受け死に瀕するもの來りて救療を求め九死に一生を得ること多し、常に漢醫の興復を以て志と爲じ、曩に漢醫繼續請願の爲め、帝國醫會の起るや、恭悅舉げられて東京團體の委員長となり、大に之に盡力せり、其説に曰く、單に醫術開業の試験規則改正の請願のみに従事し、受験生の豫備をなさざれば、一旦改正の曉、受験人なきに狼狽すべしと、乃ち門人十餘名を養ひ、常に之を激勵して曰く、我が醫方は俗に之を漢法と稱すと雖も、其實上古神聖大己貴、少彥名二尊の創定せられたる醫方に基きて、漢方を折衷せしものに過ぎず、且つ漢方の傳來以後に於て、近世名醫巨匠多く輩出し、創見發明する所少からず、今や皇かに清韓の醫學に超絶せり、故に宜く之を

日本醫術と稱すべく、之を東洋醫術と名くるも固より不可なきなり、今日斯道を維持し、以て東洋の光輝を發揚せば、眇々たる身軀を擧げて斯道の爲めに殉するも亦可ならずや、且つ萬一斯道を以て開業すること許されずとするも、鷄林の雲に入り、禹域の土に赴かば、四億の民は領を伸へて救濟の澤を望めり、吾人の前途は尙ほ廣濶なり、豈に俄かに塗窮を哭すべけんやと、嘗て詩を賦して曰く、

庭前風物自推移、
異草奇花彼一時、
獨有喬松含翠色、

歲寒高見雪霜枝、

恭悅名聞を好まず、街售を喜はず、世間或は現存醫家の爲めに傳を立てんとするものありて來りて其履歷を叩けば、笑て曰く、余に履歷ありとせば、蓋し未來にあるべし、其過去に於ては、青衫酒斑の痕を止むるに過ぎずと、是を以て世間其名を知らざるもの多し、清人錢德培の贈序に曰く、

靈素直傳

醫道精微、世已失其直傳、蓋方有一定、而病多疑似、欲求其辨、症不誤、而施方立効者、當今之世、實鮮其人、今得遇 淺田大國手於東瀛、其尊翁 栗園先生、官宮中大醫、令子 栖園先生、獨得心傳、豎喬梓、以壽世爲己任、決病處方、無不應手奏效、踵門求治者、日以數百計、我使館中、凡有疾病、則延 栖園先生、惠臨診視、余多年血症痼疾頓瘳、眷屬等隨時感患、亦無不藥到春回、誠今世之仲景也、蓋軒岐之術、融會於心、而發於外者、爰書數語、以誌感佩、

大清光緒十五年仲夏之月出使大臣參贊官錢德培書贈

翁の門人の前後合せて七八百人に及び、其贊を執るに及ばざれども、翁の風を慕ひ、或は門に詣り、或は書を以てし、質疑益を求めたる者は二千餘人あり、海内に布滿して刀圭の業を執れり、而して都下の門人四十餘名舊交を温め新知を増さんか爲め、一社を設け輔仁社と云ひ、毎月一回相會して、斯道を講論研究せり、其規約左の如し、

輔仁社規約

天下之達道五、而其一日、朋友之交、朋友者、所以拆疑勸善、相切磋以進於道、於是乎有此會之設、而會之爲業、在精覈其義、而確定其道焉、義精覈、則事不殆、道確定、則志不惑、故於施行事、莫有過謬矣。

夫一理之不明、讀書之未能貫、諮之於朋友、一朝而豁然、若無友、則雖終至於悟、亦已淹矣、故爲仁者必取友、凡入斯會者、當先持此見、以爲朋友研究之旨。

對書思理、據經論道、則心目口耳俱到、其開益神智、非淺鮮、故斯會以會讀、輪講爲第一義、宜各講一章、以爲談資、若夫無故而聚於一室、酒食嬉戲、相與爲放肆邪侈之談、夫子所謂羣居而言不及義者、吾不願之。

余謂、人不可無友、而友不可以常會、會必質疑講學、以爲樂、夫講學之益、專在論究、論究、則無一知半解之弊、或能見言外之意、是以有疑必問、有問必

究問難討論亦所不厭但務去好勝之心爲要。
朋友之誼聖人比之於父子君臣夫婦兄弟以爲五倫苟士之志道進則達材立功退則砥行顯名欲以垂於無窮非朋友之益則不能達况復今日同窓之朋即異日同朝之友同窓不親則同朝何以和宜謙以存己讓以下人長幼尊卑相敬愛則麗澤之誼行而和睦之基立矣。

淺田宗伯翁傳卷中終

